

nothing

津川凜

片目を閉しても世界の半分が消えることはなかった

瞼に塗ったラメを祝祭だと言う人がいた

すべてのことが起こってほしかったから

眠るたびに死んで目覚めるたびに生まれた

若さを弄んでずっと泣いていた

詩になりたいと思った

精神は永遠なのに身体からは逃れられなかった

身体はただの容れ物なのに痛いと言った

浮腫んだ顔がスマホの暗い液晶に写って

そのたびに再生産される感情があった

私みたいなブリキユアはいなかった

メンタルヘルスに問題があった

恋人に首を絞められると息ができなくなった

煙草の火が腕に押しつけられることを想像した

どれだけ愛しても口から出る言葉は空気の振動でしかなかった

感情は水のようなという比喻を用いた

私たちは生きあいつこをしていた

誰の妄想の中にも等しく存在しているすべてに絶望した少女みたいな

曖昧だけど何よりも鮮烈な偶像になりたかった

葬儀場で燃えるために生まれた可憐な花になりたかった

つまらないエレジーは嫌いだった

エーテルが何のことかは分からなかった

私だけを選ぶ神様はいなかった

反語でばかり祈っているからいつか天罰がくだるだろうと分かった
いつだって同じ匂いの血がどくどくと巡り続けていた

いのちの使い方を笑われたかった

光の速度で祈っていた